

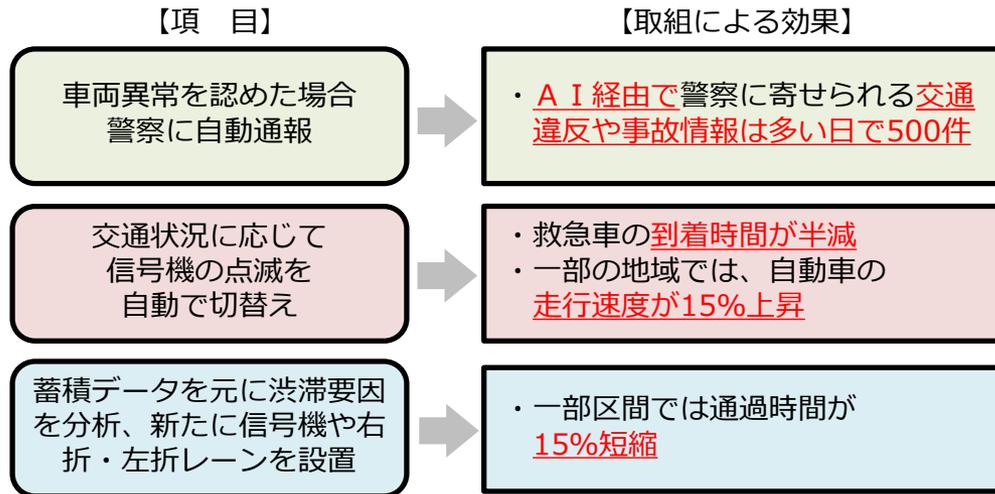
- 世界最大のEコマース企業（流通総額年52兆円）であるアリババ集団による事業展開を視察。
- AI・ビッグデータを活用した、交通渋滞の緩和や、データ共通基盤を活用した多様なサービス展開について、岡田聡良（さとし）・アリババ集団副総裁より紹介。
- 同総裁との間で、双方の強みを生かした、地方創生を含む今後の連携について意見交換。



【取り組みの概要】

道路ライブカメラの映像をAIで分析、下記の取組に活用

（2,000～3,000台のサーバー、4,000台超のカメラを配備）



交通管制センター リアルタイムモニタリング



交通状況 自動判別の様子

幹部面談



- 岡田聡良
アリババ集団副総裁兼日本アリババ代表取締役COO
2000年からソフトバンク勤務、2008年に設立されたアリババ日本法人の取締役役を設立当初から務める
- 趙戈・TMALL（天猫）輸出入事業部アジア企業誘致総監
- 金尚学・アリクラウド国際業務部プロジェクト専門家
- 史佳・グローバルリーダー小組戦略発展業務開拓専門家
- 周嘯慰・アリババ集団公共事業部シニア經理 等

人工知能発展計画

領域	担当企業
スマートシティ	アリババ
医療	テンセント
自動運転	百度（バaidu）
音声認識	アイフライテック

- 中国科学技術部は、2017年11月に「次世代人工知能発展計画」を発表し、アリババはスマートシティを担当することに。本社のある杭州市で実用化し、7都市に横展開する予定。

9号館展示区

- アリババ専門の展示館
- アリババの技術やサービス（AI、金融システム）を展示
- 2016年に杭州でG20が行われた際、カナダ、イタリア、オーストラリア、インドネシアのハイレベルも同展示館を視察
- 広報のうまさは抜群。



中国杭州市現地視察報告 ②アリババ関連施設（平成31年1月9日）

- 親橙里（チンチェンリー）は、2018年4月、本社から500mという至近距離にオープンした、アリババが提唱する「ニューリテール戦略（オンラインとオフラインの融合）」を体現する店舗であり、壮大なアリババのニューリテールの実験場
- 五芳齋（ウーファンジャイ）は、チマキが有名なレストラン。アリババの資本参加によりスマートレストランに改装。
- 夢想小鎮（ドリームタウン）は、インキュベーション施設でありながら、伝統的な建築物や街並みを上手に生かした街。

○親橙里（チンチェンリー）

- アリババ最先端ニューリテール技術が余すところなく導入され、近未来的ショッピングモール
- キャッシュレスで決済データを集めることで得られる属性情報には大きなポテンシャルが感じられた。



盒馬鮮生（ファーマーシオンシェン）

- スーパーマーケット、レストラン、オンラインショップ、ロジスティックの4つの複合体。現在は上海、北京、寧波で合計13店舗を展開し、アリババの「ニューリテール戦略」の中核。
- O2O(オンラインtoオフライン)戦略として、通常のオフラインの買い物方法に加え、3キロから5キロの範囲で、注文から配達までを自前のロジスティックにより30分で完了するというオンラインの買い物を実現。
- 生鮮食品の実物を見るため、ネット注文主体の顧客が店舗に戻りつつある。



ウーファンジャイ（スマートレストラン）

- アリペイのアプリをダウンロードし、スマホにより注文。
- バックヤードのキッチンスタッフが食事を作り、ユーザーのスマホに準備完了のメッセージ。
- 完成した食事は収納箱に格納され、スマホでスキャンして自分の食事を取り出す。
- ホールスタッフの人員費が不要で収益性が高い。



夢想小鎮（ドリームタウン）

- 立ち上げ1年半以内程度のベンチャーを中心に、テナントの数は1,000超
- 想像以上に広く、伝統的な建築物や街並みを上手に生かした街である。
- ジャック・マー氏が初期投資で多大な貢献をしていたこともあり、官民を挙げて、ベンチャーを育てようという真剣な意気込みが感じられた。



中国杭州市現地視察報告（写真）

ウーファンジャイ（スマートレストラン）



注文はスマホアプリで



電子レンジから暖かいご飯が自動で出てくる



併設の無人コンビニもキャッシュレス

夢想小鎮（ドリームタウン）



古い町並みを活用した広大なインキュベーションエリア



敷地内のごみ箱もスマート化

中国杭州市現地視察報告（写真）

親橙里（チンチェンリー）



決済はスマホを使い無人レジで オンライン注文はスマホを通じスタッフへ指示 天井のレールを伝い運ばれる商品

アリババ視察・意見交換



交通管理システム「ETシティブレイン」プロジェクトに関する展示、説明